

はじめに

いつの時代にも狂信者という人が居る。ほんの60年ほど前にも日本は狂信者の国であった。政府には別段イデオロギーとしての軍国主義は無かったが、軍部には確実に日本を神国と盲信している人々が居た。彼らは、玉音放送すら阻止しようとした。そうした人々を放任し制御しきれなかったことが戦前日本の問題であった。

狂信者と信仰者の違いはどこにあるのだろう。難しい一線かもしれないが、狂信者とは、他人の命や信条までも自分のものにしなれば気のすまない人々であると言える。

聖フランチェスコという聖人がルネサンス前夜のイタリアに登場した。

アッシジの豊かな商人の家に生まれながら、突然すべてを捨て去り修道士となった。

この人は、義勇軍に参加したり、十字軍に加わりイスラム世界への布教を試みたり、極端な無所有主義であったり、一見狂信者のような行状であったりしたが、決定的に狂信者と異なる点があった。行動を共にした仲間が還俗を望んだとき、優しく見送ったというのである。そして、人はそれぞれの生活に合わせて信仰を守ればよいと言った。この精神は当時の民衆の救いとなりフランチェスコ修道会は平民であった商工業者たちに広く受け入れられたのである。

フランチェスコ修道会の特徴はもうひとつあり、決して他者を批判しないということであった。自らを律し純粋な宗教生活を求めながら、他者がどうのこうのという事を決して言わなかった。このため、時のローマ法王にも受け入れられフランチェスコ修道会は公認された。

フランチェスコは熱烈純粋な信仰者ではあったが、決して狂信者ではなかった。

現在、一連のテロ事件によりイスラム教徒は恐ろしいという印象が流布するようになったが、本来のイスラムはそんな恐ろしいものではない。もともと砂漠の商人が始めた新興宗教であったイスラム教は商人らしい寛容さと柔軟さを兼ね備えた宗教であり、またたくまに中近東を席卷したのである。

先の聖フランチェスコは十字軍に参加しイスラム教徒を改宗させようとしたのだが、イスラムのスルタンは手厚くフランチェスコを十字軍側に送還した。

十字軍時代のアラブは輝くような文明の国であった。多くのギリシャ・ローマの古代科学の文献を引継ぎ発展もさせた。現在、数学の代数をアルジェブラと呼んだり、数字をアラビア数字というのもその証左である。また、ルネサンス期の自然科学の研究者はラテン語よりもアラビア語に通じている必要があった。中世のキリスト教がローマの自然科学を異教のものと断定していたためである。

話は変わるが、ブレンストームという会議方法がある。多くの場合、議論の場である会議は不毛であることが多い。また、理想主義者は妥協があったと必要以上に嘆く。ブレンストーミングとは、そうした会議の不毛性を排除するためのルールのことである。

そのルールの中に、“他者の意見に対して批判しない”という一条がある。まったくの卓見で、会議の中で、往々にして人々は批判に酔いしれる。批判は不毛であり代案こそが現状の打開につながるはずなのに、批判を繰り返す。

狂信者の不毛性とは、まさにここにある。ドグマに拘泥し他者を批判する。しかも、それにこだわりつづけることが何故か、人間の達成感のある部分をくすぐる。そして、大いなる惨禍をもたらすのである。しかし、だからといって狂信者を批判してはならない。批判は狂信者を育てこそすれ、弱めることにはならない。批判は、自己に対するものでも他者に対するものでも、狂信者にとって神の用意した試練でしかないからだ。そして、狂信者の温床とは偏狭な教育・差別・貧困・危害である。繁栄の影に生まれる矛盾そのものである。

日本の狂信者の温床は2.26事件に見られるように不況下の東北を中心とした極端な貧困であった。

青年将校たちは悲憤し、天皇を中心とする世直し、つまり昭和維新を断行しようとしたのである。やがて、その手段は目的となり、天皇の神性と統帥権のみが重要視されるようになる。

さらに最後は、米国の強硬な外交的制裁措置がその国粹的気分をさらに高めた。

狂信者は、いつの時代にも登場し、社会の矛盾という影に乗って時折大きく成長し、やがてその温床である影からはみ出して破滅していく。多分、われわれの社会が、狂信者が育つのに十分なだけの影を作り出すからなのであろう。

繁栄と文明の大いなる代価とも言えるが、われわれはそろそろ熟慮するだけの材料も持っていることを思い出さなければならない。

お客様へのお願い

製品の保証期間について

弊社では出荷後一年以内に限り、通常の使用の範囲で自然に故障した製品については無償で保守・代替品の交換を承っております。現品を弊社まで御送り下さい。

出張保守・フィールド費用及び拡大損害について

弊社従業員による出張保守は承りかねます。弊社製品に起因すると考えられる保守費用の弊社への請求は承りかねます。弊社の製品は用途・使用環境を限定することのできない半製品です。弊社製品を使用することによって生じたいかなる損害も弊社で負担することはできません。

遠隔地への出荷について

弊社の製品を使用した装置を海外等の遠隔地に出荷される場合には、貿易管理令によって規定された所定の手続きが必用です。弊社では手続きに必要な資料を用意しておりますので、輸出の際には弊社までご請求下さい。また、遠隔地への出荷された製品の保守については上記のとおり弊社では責任を負いかねますので使用者の責任において実施下さい。

バッテリーバックアップの信頼性について

リチウム電池の寿命は5年以上とされていますが、電池そのものの不具合やその他の部品の不具合により電池の寿命が著しく低下することがあります。また、電池によるデータの保持は原理的に完全なものではありません。極めて低い確率で、データを失う現象があります（被雷・写真のストロボ・放射線の被曝）。また、運搬時の結露、振動、極端な湿度によりデータが失われる事例もあります。プログラムの消失に不安がある場合、適切な保守を行うことのできる技術スタッフのいない遠隔地への移動の場合はプログラムをROM化して下さい。プログラム及びデータの消失に関する責任は負いかねます。

フロン全廃について

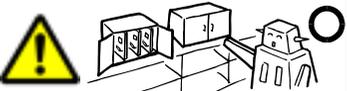
当社製品の洗浄はフロン全廃にともない無洗浄方式に暫時移項しています。ボードが未洗浄に見える場合は無洗浄タイプのフラックスを使用しております。仕様、性能には何等影響はありません。環境保全の立場からの措置ですので何卒御理解下さいますようお願い申し上げます。

仕様の変更について

半導体部品の製造中止があいついでおります。弊社では互換性を確保すべく、都度設計変更・対応処置をとっておりますが、通常使用されない機能などが一部修正削除される場合があります。あらかじめご了承下さい。

改版について

弊社ではパソコン側、MPC側システムの改版を頻繁に行っています。これは最近のニーズの多様化とユーザの要望に対応するものですが、稼働中の装置への適用はユーザの責任において行って下さい。当社では互換性の確保について十分に配慮していますが、アプリケーションによっては予測不可能な不具合を生じることがあります。これについては弊社では責任を負うことができません。

ご 注 意		
<p>人命に直接関わる機器への使用はできません。(民製品部品を使用しております)</p> 	<p>弊社製品は耐油耐水処理をしておりません。油液もしくは油ミストの付着、結露がないようにして下さい。</p> 	<p>弊社製品は振動処理をしておりません。振動箇所への設置はしないで下さい。</p> 
<p>リチウム電池は乾電池と同様に、国もしくは自治体の規定に従って廃棄して下さい。</p> 	<p>弊社製品は単体でのEMI保証しておりません。必ず金属ケースに収納して使用して下さい。</p> 	<p>弊社製品を扱う場合は静電気を与えないようにして下さい。</p> 
<p>フラッシュROM書き換え中は電源を切らないで下さい。</p> 		

ご 注 意

- 1.本書の内容の一部又は全部を無断転載することは禁止されています。
- 2.本書の内容に関しては将来予告なしに変更することがあります。
- 3.本書は内容について万全を期して作成いたしましたが、万一御不審な点や誤り、記載もれなどお気付きのことがありましたら御連絡下さい。
- 4.運用した結果の影響について3.項にかかわらず責任を負いかねますので御了承下さい。

- ・【ADVFSC】【TNYFSC】【MPCLNK】は、ACCEL Corp.の登録商標です。
- ・【FTM】は、ACCEL Corp.の商品型式です。
- ・PC-9801シリーズ用の【FTM】【IOC】を使用するには、【MS-DOS】Ver-3.30以上が必要です。
- ・【MS-DOS】【Windows】は、Microsoft Corp.の登録商標です。

M P C - 6 8 4 ユーザーズマニュアル

2 0 0 2 年 8 月 改訂第 7 版
発行責任者 横田 隆一
発 行 所 株式会社アクセル
〒391-0005
長野県茅野市仲町16-32 トウビル5 F
TEL 0266(72)8465 FAX 0266(72)8436
E-mail sales@accelmpc.co.jp
http://www.accelmpc.co.jp
企画・編集 フリーシステム

この印刷物は古紙 1 0 0 % の再生紙を使用しています。